

## 第2節 「アフリカの角」と紅海の安全保障 ——アフリカ側の視座から

遠藤 貢

### (1) 紅海安全保障と「アフリカの角」

「アフリカの角」という地域のダイナミズムを考察する上で、序論で触れたアレックス・デ・ワール (Alex De Waal) の提起している「政治的マーケットプレス」という概念<sup>1</sup>は、極めて興味深い。この概念は、現代世界におけるガバナンスの一形態であり、政治が金銭的な支払いや認可と政治的なサービスや忠誠を交換する形態で営まれていることを指している。特に「アフリカの角」という不安定な地域においては、以下でも検討するように、様々な現象化する暴力（ここにはテロリズムや海賊行為なども含まれる）がレント（不労所得）を得るための都合のよい手段になっている。デ・ワールは、この現象を、多面的かつグローバル化した「新しいレント主義」として定義し、ここには以下のような5つのレントの要素を見いだすことができるとしている。第一に鉱物資源、第二に援助（人道支援などを含む）、第三に安全保障協力（対テロ、平和維持、警察活動）、第四に政治的・政策的なレント（政治的報酬）、そして第五に犯罪（武器取引、人身売買、海賊行為）である<sup>2</sup>。

本節でみるように、近年湾岸諸国からの支援が顕著なエリトリアも「イエメン内戦」レントの最大の受益国になりつつある。また、間接的にはエチオピアもこうした湾岸諸国の進出の下で、経済権益を得る動きとともに、2019年度のノーベル平和賞の対象にもなったように、アビィ・アフメド・アリ (Abiy Ahmed Ali) 首相が、「アフリカの角」地域における和平の仲介活動を後支えするような動きも見せてきた。

### (2) アラブ首長国連邦 (UAE) の「アフリカの角」への進出

こうした「アフリカの角」地域の再編過程を現実化している重要な動きがUAEの進出である。これは、イエメン内戦に伴う動向ということは疑いない。2015年初頭以降サウジアラビアとともにジブチを拠点として対岸（イエメン）への軍事行動を開始した。しかし、2015年4月後半以降、ジブチ側からのUAE港湾管理会社・DPワールドの汚職の嫌疑を背景として、UAEとジブチの関係は悪化し、DPワールドの港湾利用契約は破棄されることになった。この事態を受け、UAEは（2008年以来イランの利用を認めていた）エリトリアのアッサブ港（とハニッシュ諸島）の30年にわたる利用（開発）契約を締結し、アッサブ港を拠点とした活動を開始することになった（これによりイランとの契約は終了した）。ただし、この段階では、エリトリアへの禁輸の安保理決議違反の可能性が指摘された。

同時期にUAEは、エリトリアに加え、ソマリアへの関与を強めることになる。2014年

までにはソマリア連邦政府（Somali Federal Government: SFG）と UAE の間でソマリア政府支援協定とともに軍事協定が締結され、協定に基づき数百名規模のソマリア軍の軍事教練とともに給与の支払いが実施された。しかしその後、未承認国家ソマリランドや他のソマリアの連邦構成州への進出が加速化する。2016年5月にはソマリランドと DP ワールド間でベルベラ港の開発運営に関わる30年間の契約が締結されたほか、本契約とは別に2017年2月にソマリランドと UAE 間でベルベラの軍事利用を認める合意がなされた。DP ワールドは、さらにボサソ（プントランド）、キスマヨ（ジュバランド）、バラワ（南西）の租借に成功した。

こうした「一帯一港」とも評価される UAE の動きはソマリア連邦政府にとって憂慮すべき材料となる。2017年2月にはソマリランドのベルベラ港の軍事基地利用に対してソマリア連邦政府閣僚から強い不満表明がなされた。なお、この時期はちょうどソマリア連邦政府において大統領「選挙」実施された時期であり、このとき当選した〈ファーマジョ〉<sup>3</sup>（Mohamed Abdullahi Mohamed “Farmajo”）大統領はカタルから資金援助があるとも指摘されていた。こうした動きの中で、2017年3月 UAE は、駐ソマリア大使を召還した。ただし、2017年6月のサウジアラビア、UAE のカタル「断交」問題に際しては、当初ソマリア連邦政府は「中立」的対応を示した。

UAE は、ソマリアへの進出の動きを具体化し、2018年3月にはソマリランドと DP ワールド間でベルベラ港利用に関する契約を最終的に締結した。これは4億4200万ドルの契約で、DP ワールドが51パーセント、ソマリランドが30パーセント、エチオピアの民間企業であるエチオピア船会社（Ethiopia Shipping Lines: ESL）が19パーセントの比率で出資する形態となった。ソマリランドの重要な港湾施設をめぐる動きに対し、〈ファーマジョ〉は、3月段階でこの契約のソマリア連邦政府としての「無効」を発表する形で、UAE に対する批判的な立場を表明している。その後、4月には、モガディシュに到着した民間の UAE 機に搭乗していた UAE 政府職員が不審な形で所持していた960万ドル押収するに至り、ソマリア連邦政府と UAE の関係悪化が顕在化した。これを受け、UAE は2014年以降実施していたソマリア軍向けの軍事訓練プログラムを終了して完全撤退したほか、病院等でのプロジェクトも停止することになった。

一方でソマリランドは、カタルとの関係を絶ち、UAE との関係強化を進める動きを示した。この動きには連邦を構成するプントランド、ヒールシャーベル、ガラムダーグの各州も追随したことで、ソマリア連邦政府との関係悪化を招いた。こうした中、ソマリア連邦政府はトルコ、カタルとの関係強化の動きを強める動きを示していることから、ソマリア国内情勢の分断・不安定化につながることへの懸念も出てきた<sup>4</sup>。

### (3) 「アフリカの角」側からみた UAE の進出

ソマリアでは不安定化が懸念される一方、UAE の進出を歓迎する国が存在する。それがエチオピアである。1993 年のエリトリア独立以降、「内陸国」エチオピアにとって、利用可能な港湾は極めて重要な意味を持っていた。2015 年のエチオピアの輸出（30 億ドル）・輸入（130 億ドル）の約 95 パーセントは、アジスアベバから中国建設の鉄道を利用して約半日かかるジブチ経由に依存していた。そのため、エチオピアにとってはジブチへの過度の依存からの脱却への強い希望が存在していた。エチオピアは、従来からもソマリランドとの間でベルベラ港利用と輸送に関する取り決め（Utilization of Port of Berbera and Transit Service）を調印（2005 年）したり、ESL を通じたベルベラ港への関与の可能性を模索したりしてきた。さらに、2011 年には、ESL、ソマリランドが中国企業ペトロトランス（Petro Trans）との協定の下、石油や輸送に関わる分野での協力の下、下ベルベラ港開発を模索したものの、ペトロトランスが港湾施設や LNG 施設への保険を調達できず、協定実現にはいたらなかった<sup>5</sup>。

大きな転機は、「アラブの春」及びイエメン内戦を契機とする湾岸諸国の紅海対岸への関心増大に伴う「アフリカの角」側の港湾「利用」の動きであった。エチオピアも UAE に先駆けて、2015 年 2 月にはソマリランドとの間でベルベラ港開発に関する協議を行っている。これは翌 3 月には UAE 企業の P&O Ports 社とソマリランド政府間でベルベラを中心とした港湾開発の協議にもつながっていく。そして 4 月にはエチオピアと UAE 間の共同閣僚委員会会合がアブダビで開催され、貿易関係強化を協議している。これは、時期的に上記の UAE とジブチの関係悪化に伴い、UAE にとってのベルベラ港の重要性の認識とも呼応していた。こうした過程を経て、2018 年 3 月に締結されたベルベラ港利用に関する契約への参加は、エチオピアの「思い描いてきた」ベルベラ港利用のあり方の礎となるという評価も可能である。

### (4) エチオピア・エリトリア関係

「アフリカの角」の新たなダイナミズムの中で、驚きを持って迎えられたのが、2018 年 7 月 9 日にエリトリアを訪問したエチオピアのアビィ首相とエリトリアのイサイアス・アフエウエルキ（Isaias Afewerki）大統領との間で和平友好条約調印という「事件」であった。これを一つの理由としてアビィ首相は 2019 年のノーベル平和賞を受賞することになった。

両国は、1998 年 5 月エリトリア軍によるエチオピア侵攻で戦争が勃発し、7 万人に及ぶ犠牲を出してきた経緯がある。そこでの大きな争点は、国境地帯の都市バドメに象徴される領土問題であり、激しい空爆を含む対立に発展した。その後、エチオピアが優勢となった 2000 年 6 月の停戦協定、12 月の包括的和平協定を経て、両国軍は撤退し、同年 9 月には国連安保理が停戦監視する国連エチオピア・エリトリア派遣団の派遣が決定される展開

が続いてきた。こうした中で、エチオピアは海上へのアクセスについては、エリトリアからジブチに転換するとともに、「テロとの戦い」や海賊対処の主戦場としてのソマリアへの対応という観点からも、エチオピアはジブチとの関係強化が進んだ経緯がある。

一方のエリトリアは国際的に孤立し、2008年頃、マフムード・アフマディネジャード(Maḥmūd Aḥmadī-nezhād)大統領の時代にイランとの関係強化の動きを進め、上でみたようにアッサブ港(とハニッシュ諸島)の30年にわたる利用(開発)契約を締結するなどの関係強化が進んだ。しかし、2009年以降「国連安保理決議」に基づく武器禁輸、ならびに一部の政府関係者に対する渡航禁止や資産凍結の制裁(「国連安保理決議」第1907号)が課せられるなど、国際的に孤立してきたほか、その強権体制の下で多くの難民の流出元となってきた。また、エリトリアは湾岸諸国の中では、カタールとも良好な関係を維持し、エリトリアとジブチの国境をめぐる係争を抑えるため、カタール軍が展開するといった状況があった。しかし、イエメン内戦を転機として、2015年4月にジブチとUAEとの間で外交上の対立の中で、エリトリアはイランから離れ、サウジアラビアとの関係を強化し、サウジアラビアもアッサブ港を利用することになった。サウジアラビアはUAEともどもジブチの施設から立ち退いた。2016年4月29日にエリトリアはサウジアラビアとの間で安全保障・軍事協力協定を調印し、イエメン内戦に400名程度のエリトリア兵力を派遣している。そして、2017年6月の「断交」問題でエリトリアはUAE、サウジ側に「転向」したこともあり、カタールは兵力を引き上げている。

他方エチオピアでは、国内の動き、特にオロモ居住地域での暴動などを受け、2018年2月15日にハイレマリアム・デサレン(Hailemariam Desalegn Boshe)首相が辞任し、2018年4月2日には人民代表議会(下院)はアビィ与党エチオピア人民革命民主戦線(Ethiopian People's Revolutionary Democratic Front: EPRDF)新議長を首相に選出した。このアビィこそ、エリトリアとの和平に迅速に動いた人物であった。アビィはその首相就任演説でエリトリアとの関係修復を図る政策を発表したことにみられるように、当初より「アフリカの角」における関係改善を模索していた。

ここで興味深いのは、アビィ首相がサウジアラビアとUAEがその和平への動きを後押しするような役割を果たしている点である。5月18日にはサルマーン(Salmān bin 'Abd al-'Azīz Āl Sa'ūd)国王の招待でアビィ首相がサウジアラビアを訪問している。6月5日には与党EPRDF執行委員会で平和と安定の回復を目的とし、アルジェ和平合意及びエリトリア・エチオピア国境委員会の決定(2002年)を完全に受諾・履行する旨を決定し、その中で係争地バドメをエチオピア側が放棄することとなった。この直後、6月15日にはアブダビのムハンマド・ビン・ザーイド・アール・ナヒヤーン(Muḥammad bin Zāyed Āl Nahyān)皇太子一行がエチオピア訪問し、外国為替安定のために10億ドル、さらに20億ドルの経済援助供与を約束したほか、投資に関する協議(農業分野への関心)が行われて

いる。そして、この後7月3日にはエリトリアのイサイアス大統領が UAE を訪問し、ムハンマド・ビン・ザーイドと会談し、エリトリアへの投資などが協議されたとみられている。そしてこの直後の7月9日にエリトピアとエリトリアの和平友好条約が調印されたのである。

さらに、7月24日にはアブダビで3者会談（ムハンマド・ビン・ザーイド・アブダビ皇太子兼 UAE 軍副最高司令官、エチオピア首相、エリトリア大統領）が行われ、さらに9月16日にはジェッダでサウジアラビア仲介の下、エチオピアとエリトリアの間で7項目からなる「ジェッダ平和協定」が締結されている<sup>6</sup>。

### (5) 「アフリカの角」の域内関係の動向

新展開とも見える「アフリカの角」の情勢の中で、アビイ首相は、この地域の仲介者としての役割を果たそうとする動きもみられてきた。2018年6月16日にアビイ首相はモガディシユを訪問し、〈ファーマジョ〉と会談している。内容的には曖昧な部分も多いものの、政治・経済関係における統合と港湾の共同開発に関する「覚え書き」に調印している。この後、〈ファーマジョ〉はソマリランドとの協議に応じる姿勢に転じていることから、国内安定化とともに UAE との関係についても一定の考慮の可能性が示されて面も見られる。ただし、〈ファーマジョ〉は、カタールとの関係は維持の方向性も同時に示している。

2018年7月28日に〈ファーマジョ〉はエリトリアを訪問しているほか、中国・アフリカ協力フォーラム（Forum on China – Africa Cooperation: FOCAC）出席直後の9月5日に〈ファーマジョ〉はエリトリアを再訪し、エリトリア、エチオピア、ソマリア3カ国の政治、経済、社会、安全保障、文化協力に関わる協定を調印している。

2018年10月17日にはエチオピアとエリトリア外相がソマリア（モガディシユ）を訪問して、共同記者発表においてソマリアの治安実現が主要課題ということを示している。こうした一連の地域での和平の進展とも見える動きは、2018年11月14日の「国連安保理決議」第2444号の採択による、エリトリアに対する武器禁輸や個人の資産凍結などの制裁措置の解除につながることになった。さらに、2019年2月15日にはエチオピア・ジブチ間にエチオピア東部で産出する天然ガスのパイプライン建設・輸送に関する協定締結が結ばれている。なお、パイプラインの建設は中国のベンチャー企業 POLY-GCL が担う形になっている。

上記の一連の動きが、「アフリカの角」地域の安定化に向かう兆しを示すものであるかは定かではない。特に2020年に総選挙が予定されているエチオピアの国内情勢は不安定化を増す可能性も指摘されてきており、予断を許さない状況が続くことが予想される。

### (6) トルコの進出と変化する「アフリカの角」地域の構図

2008年にトルコ・アフリカ協力サミットが開催された実績はあるが、トルコがより本格的にアフリカ、特にソマリアに関与するようになる契機は、2011年の飢饉に際し、レジェップ・タイイップ・エルドアン（Recep Tayyip Erdoğan）首相（当時）が初めてソマリア訪問したことであろう（第5節も参照）。この際に、教育開発に関する49年にわたる協定締結など「人道分野支援」での強いコミットメントを示した。2011年11月1日にはソマリアのトルコ大使館が再開し、2016年6月にはモガディシュにトルコとしては世界最大規模の大使館を建設し、開設した。

その後、トルコはソマリアに政治的にも関与し、2012年のSFGの樹立の際には大きな支援国となった。2013年4月にはアンカラにおいてSFGのハッサン・シェイク・モハムド（Hassan Sheikh Mohamud）大統領（当時）と分離独立を主張するソマリランドの<シランヨ>（Axmed Maxamed Maxamuud “Siilaanyo”）大統領（当時）の交渉を仲介している。さらにトルコは、2015年3月に首都モガディシュの約400ヘクタールに及ぶ敷地に軍事教練基地建設を開始し、2017年9月末に運用を開始した。その目的としてあげられているのは、今後1万人のソマリア軍兵力の育成である。

トルコの「アフリカの角」における新たな動きとして注目されるのが、2017年末にスーダンを訪問したトルコのエルドアン大統領が、スーダンとの間に数十億ドル規模に上る経済協定に調印したことである。この際トルコはスアキン島を99年間租借する契約も締結している。トルコとスーダンの新たな関係は、この段階で、スーダンとエジプト、サウジアラビア、UAEの関係が緊張する局面を生み出した面がある。2018年1月にイサイアス大統領がエジプトを訪問し、経済関係を中心議題とし、「双方に重要性を持つ地域的・国際的課題」を議論した際に、エジプトがエリトリアにあるUAEのアッサブ基地に向けて数百の兵力を送ったとする報道をアルジャジーラが行っている。これはエジプトがスーダンを牽制する狙いがあったと評価されている。これを受け、スーダンはエリトリアとの国境を封鎖するとともに、駐エジプト・スーダン大使を召還するなど、エジプトとスーダンの関係の緊張にも発展した。

この段階においてエリトリアとしては、UAEとサウジアラビアという湾岸諸国への基地の提供と同様、エジプトとの関係強化に向けた取り組みを狙いとしていたとみられ、当時エチオピアとの国境紛争を抱えていたエリトリアは、エジプトの後ろ盾をえることもその射程にあったと考えられる。

しかし、すでにみたようにUAEとサウジアラビアの一定の関与を伴う形でのエチオピアとエリトリアの和平実現は、トルコのアフリカ進出をめぐる構図を一部塗り替える側面を有している。また、従来からナイル川の権益をめぐる課題を抱えてきた下流域のエジプトと上流域において巨大な「グランド・エチオピアン・ルネサンス・ダム（Grand Ethiopian

Renaissance Dam: GERD)」の建設が進むエチオピアとの関係は、中流域のスーダンも含めた今後の協議が極めて重要であり、長期的な「アフリカの角」地域の安定に不可欠の構成要素となっていく点にも留意が必要であろう（この点は第4節も参照）。

— 注 —

- 1 De Waal Alex, *The Real Politics of the Horn of Africa: Money, War and the Business of Power* (London: Polity Press, 2015), pp. 16-34.
- 2 Ibid., p. 50, Chapter11.
- 3 <>は、ソマリアで一般的にみられるニックネームを示すために用いている。
- 4 International Crisis Group, “Somalia and the Gulf Crisis” *Crisis Group Africa Report*, No.260 (June 2018).
- 5 この点についての詳細は以下を参照。Cannon, B and A. Rossiter, “Ethiopia, Berbera Port and the Shifting Balance of Power in the Horn of Africa,” *Rising Powers Quarterly* vol.2, no.4(2017), pp. 7-29.
- 6 この会合にはサルマーン国王のほか、ムハンマド・ビン・サルマーン (Muhammad bin Salmān Āl Sa‘ūd) 皇太子、アントニオ・グテーレス (António Manuel de Oliveira Guterres) 国連事務総長も出席している。

